別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者　朝妻　恵里子

本論文「ロマン･ヤコブソンの言語論における言語記号の「周縁性」」は、ロシアの言語学者ロマン･ヤコブソンの記号論とコミュニケーション論に関わる思想を総括し、その中心的な観念が具体的な言語分析、とくにロシア語の格の形態論的･意味論的理論づけにいかに活かされているかを綿密に考察することによって、ヤコブソンの記号論の独自性を明らかにしようとするものである。

論文は、2 部から構成されている。第 1 部の 3 つ章では、ヤコブソンの一般記号論・言語理論とコミュニケーション論との繋がりを検討することによって、その 6 機能モデルとこのモデルを構成する諸因子の吟味を行っている。第 2 部の 3 つの章では、ヤコブソンのロシア語の形態論に関する主要論文を批判的に分析し、その理論の修正を行うとともに、ロシア語の格の具体的な分析を通じて、その理論の持つ可能性を考察している。

まず、第 1 章では、ソシュールの言語理論との比較を通して、ヤコブソンの言語理論の特徴が概観される。筆者は、ヤコブソンがソシュールの sinifiant と sinifié を signans と signatum と言い換えたことに注目し、これは単なる言い換えではなく、そこには双方の結びつきを恣意的と見るソシュールと、その結びつきの有縁性を主張するヤコブソンの理論的な違いが現れていると指摘する。そして、ヤコブソンの言語記号論には、signans と signatum の恣意的な結びつきに基づく「象徴性」に加えて、双方の類似的な関係に基づく「類像性」、近接的な関係に基づく「指標性」という 3 つの概念が中心にあることを指摘している。

「類像性」を扱った第 2 章では、ヤコブソンが考えていた言語記号の「類像性」は、単に形式と意味との間の実際的な類似性に依拠しているだけではなく、人間の認知的な思考プロセスに根づいた普遍的な作用にも基づいていることが明らかにされている。さらに、第 3 章では、「指標性」が取り上げられ、そのコミュニケーション論の 6 機能モデルの検討がなされる。ここでヤコブソンが発話行為の基準点を参照することによって成り立つ指標的な文法カテゴリー（ダイクシス）があるという考えに基づいて、コードとメッセージとが直接に結びつく言語現象を理論化していること、さらにこうした言語記号の指標的性質はダイクシスだけではなく、あらゆる言語活動で作用すると考え、これを「コンテクスト」という概念に拡大したことが指摘される。そして、ヤコブソンの理論の特質が、「指標性」と「コンテクスト」という概念を導入することによって、言語と発話事象を含む事象世界とが結びつくという考えであることが明らかにされている。

第 2 部の第 4 章では、意味の非対称的対立に関わる「標識」概念の検討と、ロシア語形態論分析における応用と変遷の考察がなされる。まず、ヤコブソンが 1936 年と 1958 年にロシア語の格に関する内容の重複する 2 つの論文を書いた理由は理論の修正にあり、その原因が標識概念の転換、すなわち非対称的対立（欠性対立）から両極対立への転換にあったことが指摘される。

次いで、第 5 章と第 6 章では、ヤコブソンがロシア語の格の一般的意味として取り出した「方向性」、「範囲性」、「周縁性」という 3 つの意味素性でロシア語の 6 つの格を正確に分析できるのかという問題の検討がなされる。第 5 章では、筆者は、ヤコブソンが前置詞句への言及を行いながらも、単独での格の働きと前置詞に支配された格とを同一視していることが指摘し、ロシア語の前置詞に支配された格の詳細な分析を行うことによって、ヤコブソンの格理論の補完･修正を行っている。そして、個々の前置詞の帯びる複数の意味がメタファー的拡張系列を措定することによって単一の原義に還元することが可能であること、さらに前置詞の原義と名詞の格の間に整合

性があることを立証し、ある言語記号のもつ複数個の個別的意味が一般規則によって一般的意味に還元しうるというヤコブソンの理論の有効性を確認している。

第 6 章では、ロシア語の造格の意味と用法の詳細な分析によって、「周縁性」という意味素性とはいかなるものかという問題に焦点が当てられる。まず、造格の多様な意味は中核的意味である「道具」からのメタファー的意味拡張で説明できると同時に、具体的な文における造格の個別的意味は周囲の語やコンテクスト、さらには発話の状況を参照しなければ決定できないこと、また、文の中心に対して「周縁」に位置する格である造格が、意味･情報の観点からは中心的な役割を担うこともあり、そこには話し手の認知的な視点が反映されることから、「周縁性」という意味素性が、記号の「指標的性質」と深く関わっていることが示される。そして、ヤコブソンは形態論的な見地からロシア語の格を分析し、造格という格形式に「周縁性」という意味素性を与えているが、「周縁性」という意味素性は、彼がコミュニケーション論や言語記号論で展開した「指標性」と「コンテクスト」という概念と関連づけてはじめて理解できることが論じられている。

本論文の功績の一つは、1950 年代末までのヤコブソンの一般記号理論構築への軌跡を跡づけ、その射程を詳らかにしようとしていることである。とくに注目すべき点は筆者が、ヤコブソンの音韻研究と言語機能論をつなぐ要として標識概念に着目し、そのロシア語形態論に関する諸研究を分析することにより、その進展および変遷を明らかにし、さらに、そして論文「言語学と詩学」で提起されたいわゆる６機能モデルの解釈にひとつの突破口を開いた点である。

従来のヤコブソン研究においては、６機能モデルそのものの言語理論史における意義、そしてモデルを構成する諸要因の検討といった面はなおざりにされてきた。本論文は、当の６機能モデルと相前後して著されつつもそれと関連づけて理解されることのなかった文法範疇論を取りあげ、その理論構造を「指示的意味モデル」として再構築することにより６機能モデルの解釈と評価に大きく貢献している。これによって、ヤコブソンの構想していた「言語科学」の全体像が明確にされただけでなく、従来、二律背反として捉えられていたラングとパロールがヤコブソンの再定義によっていかに揚棄されているか、また「コンテクスト」という定義項がどのような内実を伴うかを明らかにしている。

また、第 2 部でなされているヤコブソンの格理論の修正・補完、そしてロシア語の諸格の用法と意味の詳細な分析を通じた理論の検証では、詳細な用法分析と理論的考察において高い水準を示しており、この点はロシア語の格に関する研究を含むロシア語学への大きな貢献であると見なすことができる。

ただ、問題領域が一般記号論・コミュニケーション論とロシア語文法研究とにまたがっているために、論文が 2 部構成となっているが、審査委員の中からは、第 1 章とロシア語文法理論を扱った第 2 章との関連が必ずしも明確ではないことが指摘された。また、第 2 部で挙げられているロシア語の用例の個々の表現の微差や合文法性を見分ける手法が必ずしも充分ではない、第 6 章の造格の分析はヤコブソンの一般的意味に関する理論を支持するには充分であるが、その考証に用いられた具体的な意味タイプがそもそもいかなる因子によって生じ、なぜ個別的に検出可能であるか、それらがヤコブソンの「個別的意味」に該当するかどうかについて論証が尽くされているとは言い難い、という意見が出された。しかしながら、本論文は、これまで主として文学理論や一般言語学の分野でなされてきたヤコブソンの理論を、ヤコブソン本来の専門分野であり、その理論的営為の中核をなすスラヴ語研究の角度から再検討する作業を行っており、その結果、従来見逃されてきた諸問題に光を当ててることに貢献していることを考えれば、上記のような欠点は本論文の価値を損なうものではないことは審査委員全員の一致した結論である。

したがって、本審査委員会は本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。